

科が多い点は特に評価できる。内容的にも近年の教養重視、導入教育の実施という線に沿った改革が行われ、基礎をしっかりと学ばせた上で、さらに進んだ学修では広範にわたって履修科目を選択できるカリキュラム構造になったといえる。

また人間福祉学部には資格取得を目指す学生が多いという特殊事情があるが、必修科目の単位数を必要最低限に抑えて、資格取得を希望する学生にも希望しない学生にも対応し、多様な学生の勉学意欲に応えられるようなカリキュラム構造を構築すると同時に履修モデルを提示したことは評価できる。

【課題・方策】 体系的なカリキュラムを整備する際に常に問題となるのは、そのカリキュラム体系が目標とする理想のとおり単位を取得することのできなかつた学生の対処である。今回の改革では、複数の学科で、基礎力の充実を図ることが一つの目標とされたが、それは同時に、基礎力が身に付かなかつた学生に対するケアも必要であることを意味する。また自由選択科目の増加は、ともすると無節操な科目履修を許すことにも繋がりがねない。こうした学科では、具体的な履修モデルを提示し、学習の成果を目に見える形で示しつつ、個々の学生にきめ細かな履修指導をしなければならない。

7 授業形態と単位の関係

1) 授業形態と単位計算方法の妥当性

(A群:各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性)

【現状の説明】 本学の授業科目は、授業形態から次の5つに区分することができる。

- (1) 講義
- (2) 演習（語学、コンピュータ関係を含む）
- (3) 実験、実習および実技
- (4) 卒業論文
- (5) その他、学外での研修や資格取得によるもの

その単位認定は、(1)から(3)については聖学院大学学則に則って行われる。学則第22条は大学設置基準に基づいて、単位認定基準を以下のように定めている。「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により計算するものとする。」

- (1) 講義については、15時間の授業をもって1単位とする。
- (2) 演習については、30時間の授業をもって1単位とする。ただし別に定める授業科目については、15時間の授業をもって1単位とする。
- (3) 実験、実習および実技については、45時間の授業をもって1単位とする。た

だし別に定める授業科目については、30時間の授業をもって1単位とする。

また、(4)卒業論文については学則第22条の2に「前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等にかかわる授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修を考慮して、単位数をさだめることができる。」とあり、全学科共通で6単位を授与している。

(5)その他、学外での研修や資格取得によるものについては、語学研修は語学の単位認定方法に基づき、インターンシップ、インディペンデント・スタディ、その他、独自に単位認定方法を定めているものについてはその内規に従って単位認定をしている。

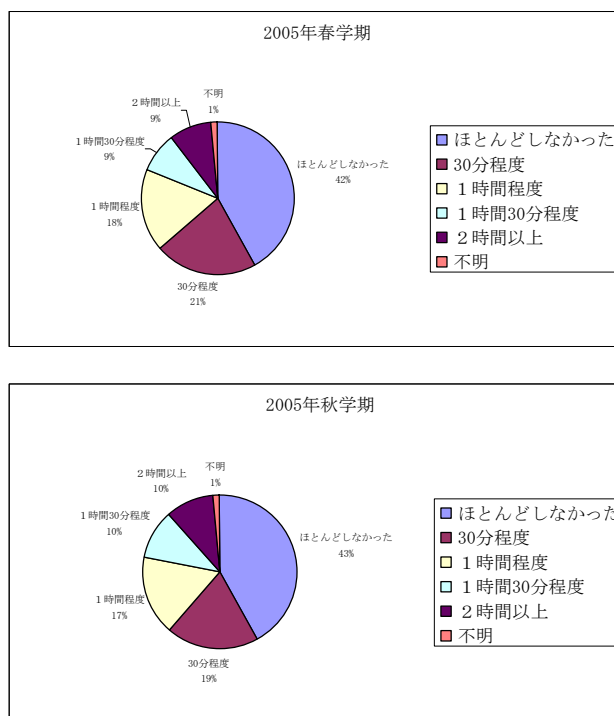
「インターンシップ」については「インターンシップ」の項目(p.74)で運営方法を詳述したとおり、実習ノート、レポートなどによって2単位を授与し、「インディペンデント・スタディ」については研修、及び事前・事後の学修時間を学則第22条の授業科目の必要単位数に合わせて計算し、4、2、ないし1単位を与えている。

【点検・評価】 現状で述べたとおり、講義科目、演習科目、実験・実習・実技科目については、大学設置基準に基づき聖学院大学学則第22条で授業形態に応じた認定単位数を規定しており、それに則って厳格に単位認定がなされている。また学外で行われる様々な研修や自主学修に対しても、学内での学修に準じて、決して安易に単位を授与することがないよう、研修時間・内容などを厳密に審査して単位を授与していることは評価できる。

次に必要なのは、本項目の「単位計算方法が各授業科目の特徴・内容や履修形態に適しているか」の点検・評価である。そこでは概ね2点が問題となる。その第1は、しばしば提出される問題であるが、講義科目に比べて予習や復習、発表の準備等に一層多くの自宅学修時間を要する語学や演習の単位数がなぜ講義科目の2分の1にしかないのか、という問題、第2は、現実には、学生が各科目の学修に自宅学修を含めて1単位当たり45時間を充てているかという問題である。そしてもし講義科目に対する学生の自宅学習時間が大きく不足しているとすれば、それを基準にして、語学や演習の単位数が2分の1にしかないことを議論するのは理に適っていないことになる。

本学では2005年度春学期から授業アンケートの項目に、「あなたはこの授業のために、宿題を含めて一週間に平均どれくらい勉強しましたか」という質問項目を設けて学生の自宅学習時間の実態調査を開始した。その結果は以下のグラフのとおりであるが、語学科目の方が講義科目よりも数値は高いものの、「ほとんどしなかった」「30分程度」「1時間程度」「1時間30分程度」「2時間以上」という5つの選択肢のうち、講義科目、語学科目とも「ほとんどしなかった」と答えた学生が一番多く、大半を占めた。各学期とも試験が始まる前の調査なので、この数字には試験勉強やレポート作成のための時間は含まれていないものの、学生の日常の家庭学修時間が極めて少ないという現実が浮かび上がった。

各科目の一週間の自宅学習の時間数



これを厳密に単位計算すれば、講義科目に4単位を与えることはとうてい不可能である。一方、自宅学習時間と授業への満足度との相関関係を見てみると、「2時間以上」と答えた者のうち半分以上の学生は授業にも「大変満足している」と答えている。これには、時間をかけて勉強したのでその科目の良さが分かったという場合と、その科目が好きだから時間をかけて勉強したという場合の二方向が考えられるが、学ぶことの真の喜びはこの相乗作用によって形成されると考えられることから、学生の自宅学習時間を増やす工夫が必要である。

【課題・方策】 授業形態と単位数の問題に関しては二方面から対処する必要がある。現行の単位制度に相応しい学修内容を確保するための教室外学修についての指導の徹底と、学生の学修状況に合わせた各科目の単位数の見直しである。後者については、大学全体の制度として現行の講義科目や演習科目の単位数の見直しが必要であろう。前者の教室外学修については一部の授業で行っても効果は期待できないことから、非常勤（兼任）講師を含めた全学の教員が一致して行わなければ意味はない。このためには大学入学以前に自学自習の習慣をほとんど持たず、アルバイトに時間を費やしている多くの学生たちの意識改革や生活指導をも併せて行わなければならない、大きな労力を要することは間違いがない。またこれ以外にも、関連する周辺環境の整備が必要である。教室外学修が増加すれば学生の提出物なども増え、教員がその整理や添削に費やす時間も増える。そのため、コマ数軽減の問題や学内行政に関わる時間の削減、授業をサポートする補助職員やTAなどの体制の充実などについて検討する必要がある。また、図書館や自習室など、授業時間

第3章

学士課程の教育内容・方法等

外の学生の学修環境を整備する必要もある。いずれにしても、このことを推進するための教員の合意形成が第一の課題である。しかしまずは、各教員が、学生が関心を持ちやすいテーマを工夫して課題を与える、グループ発表を命ずる、など、実行できるところから改善に取り組まなければならない。まずはFD委員会にこの問題を提案することから始める。

8 単位互換、認定等

1) 国外の大学との提携、単位互換

(B群:国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあつては、実施している単位互換方法の適切性)

(C群:海外の大学との学生交流協定の締結状況とそのカリキュラム上の位置付け・発展途上国に対する教育支援を行っている場合における、そうした支援の適切性)

本学では国内の大学との単位互換協定や発展途上国に対する教育支援は行っていないので、大学基準協会の2項目「B群:国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあつては、実施している単位互換方法の適切性」と「C群:海外の大学との学生交流協定の締結状況とそのカリキュラム上の位置付け・発展途上国に対する教育支援を行っている場合における、そうした支援の適切性」を一括して「海外の大学との姉妹校提携の締結状況とそのカリキュラム上の位置付け、単位互換の適切性」として置き換え、点検・評価することとする。

【現状の説明】 本学では、アメリカのリンチバーグ大学、オグルソープ大学、ベサニー大学、ラグレインジ大学、韓国の啓明大学校、聖潔大学校、湖西大学校、ルーマニアのトランシルバニア大学と姉妹校提携の契約を結び、学生交流、交換留学、単位互換を行っている。

交換留学生としてアメリカの大学に留学するためには旧TOEFL500点以上の英語の能力が必要であるために、今のところ毎年1名程度しか派遣できていないが、2005年度秋学期にはSLI (Seigakuin Language Institute) が英語の特訓を行い、2006年度には4名の学生を派遣できる予定である。韓国の大学との提携は2005年度に始まり、3名の学生が留学した。いずれも留学終了後、提携校で発行された成績通知書・成績証明書をもとに、本学の所属学科長及び所属学科が単位読替科目を決定し、単位を授与している。単位認定に当たっては、現地での授業内容と本学のカリキュラムをつき合わせ、該当する科目について、現地での授業時間数を本学の当該科目の単位数に換算している。これまでの留学生には、8単位から12単位の間で単位読替をした。

また、提携校からの学生も受け入れており、アメリカからは毎年ほぼ1名ずつ、韓国からは2名の留学生が来日した。特に日本語能力の不足しているアメリカ人学生のためには、その学生の専攻分野に応じて「Japan Studies Program」として英語の授業を開講して対応してきた。しかし英語による授業は非漢字圏からの留学生や留学を希望する日本人学生にとっても有効であるので、2006年度からは「Japanese Economy Today」と「Poetry as a Popular Art」の2科目をそれぞれ政治経済学科と欧米文化学科の専門科